

# 児島先生を送る

塩 旗 伸一郎

(中国語)

今年度、在外研究で中国西安に滞在している。親族訪問に來た家人を国際線の出発ゲートで何度か見送った。

入口附近は、海外へ留学する若者、任地に赴く社員、一時帰国を終えて帰る家族と、それを見送る人とおぼしき老若男女がそれぞれに別れを惜しみ、涙にくれながら、何度も手を振って中へ入っていく。見ているこちらにも身につまされてもらい泣きし、やはり手を振って家人を送る。幾度経験を積んでも、空港での見送りは苦手である。

近い将来、再会を予定している短い別れでさえそうなのだ。これが永の訣れとなれば、どんなに受けいれがたいことだろうといつも考える。しかし人と生まれてきた以上、自分の愛したすべての人といつかは訣れなければならない。たとえどれほど強いきずなで結ばれていようと、ひとり残らず、最後はその日を迎えないといけない。それはずいぶんつらい事に思われるけれども、宿命として誰もが等しく受けいれるほかはない。あるのは時間の差だけである。

児島先生はそのような受けいれがたい訣れを私にもたらした数少ない、そして初めての年下の人であった。

児島先生とのつきあいはたった3年間であったが、その短い間にも、彼の学問研究や教育にかける情熱とその水準の高さ、他人を思いやり、他人のために働く力量の大きさは存分に領会された。困難から逃げず、何事にも積極的に取り組み、大情小事を分かつたおろそかにすることがなかった。多くの学生たちに慕われる傑出した教員であると同時に、大学や属する研究部、部門、教室等の今後のあり方について常に思索し、実際の行動によって深く信頼される同僚でもあった。

こう書くといかにも非の打ちどころがない優等生みたいだが、実際の児島先生

は（優等生であったことは間違いないが）有能ぶりを外に出さず、暖かさと豪快さを内にたたえた人であった。それは彼が「大学」に対してもっていた理想像と重なっている。

大学が社会に対して負っている責任を果たすことへの要請は年々強まる傾向にある。そのために大学がコンプライアンスを強化するのは当然である。しかしそれが昂じて、自らを存立させている社会の価値観そのものを対象化し批判する自由を失うならば、大学の存在理由をも掘り崩しかねない。

特に近年は、大学の「生き残り」が公然と掲げられることが珍しくなくなった。大学が潰れては元も子もないという認識はリアルである。そのために必要な措置はすみやかに実行されるべきであり、全構成員が一致協力すべきである。だが社会的には内輪の都合でしかない目標をすべてに優先させて突き進めば、生き残りに役立つか否かで事の是非が決まるようにならないだろうか。そう心配する教職員たちもいる。彼（女）らは「生き残り」の絶対化による思考の萎縮の中に、「生き残り」を脅かす内なる貧困を見ている。

児島先生は、大学とはもっと自由でおおらかで、ハチャメチャを許容する度量をそなえているべきだと考えていた。内部統制や危機管理が叫ばれ、どこか余裕のようなものが少なくなってきたように感じられる私たちの大学や組織にとって、教員としての務めを几帳面に果たしつつ、「大学らしさ」への理想をもって改革に加わりこれを推進する児島先生の存在は、どうしても必要だった。

せせこましさや息苦しさを嫌い、大きくて懐の深い中国という対象のおもしろさを、研究と教育を通して人に伝えたいと児島先生は語っていた。それが私の聞いた最後の言葉となった。

児島先生の棺を雨の中多くの仲間が見送った日は、旧暦五月五日の端午節だった。私は家での禁酒の誓いを破り、彼の好きだった黄酒と粽を買ってきて、ひとり対酌した。

痛惜と感謝の念はとこしえに尽きることはない。短いつきあいではあったが、それだけに印象はいつまでも鮮烈である。だけど児島さん、疲れすぎないよう、ときには逃げたらよかったのに。